様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月 10 日現在

機関番号：25301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20592557
研究課題名（和文）
外来がん化学療法を受ける患者・家族のセルフケア支援プログラムに基づく介入研究
研究課題名（英文）
A Study on the Intervention Based on Self-care Support Program for Outpatients Undergoing Chemotherapy for Cancer and Families
研究代表者
掛橋　千賀子（KAKEHASHI CHIKAKO）
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：60185725

研究成果の概要（和文）：
外来がん化学療法を受ける患者･家族のセルフケアを支援するためプログラム試案を開発し，さらに内容を充実・強化するために DVD を作成した．この有用性を検討するために患者・家族及び看護師，認定看護師を対象に調査を行った．その結果，DVD はイメージ化を図り,セルフケアを動機付けるための視聴覚教材として有用であるとの評価を得た．またプログラム試案とほとんど同様の内容がパンフレットにより指導されていたが，格差がみられ標準化が課題である．
研究成果の概要（英文）：
In this study, we developed the tentative program to support self-care of the outpatients undergoing cancer chemotherapy and families, and produced the DVD that made it possible to improve and promote self-care. To consider its validity, we surveyed the opinions of the patients and families, and nurses including certified ones. The results found that the DVD was valid as a visual aid to motivate them to implement self-care. So far the similar kind of intervention has been provided with the patients and families but according to the pamphlets, and there still remains the problem regarding standardization self-care support program.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：①看護学　②がん看護　③外来がん化学療法　④セルフケア支援　⑤介入研究

１．研究開始当初の背景

近年の化学療法の進歩により外来で化学療法を受けながら療養生活を継続することが可能となった．しかし，その背景には医療システムの改革により入院から外来へのシフトが急速化し，十分な体制が整っていないにもかかわらず，多くの病院で外来化学療法が行われるようになった．特に在宅においては，入院と異なり常に医療者が側に居ないため，患者・家族，自らが副作用などの症状をコントロールしなければならない状況に在り，安全に治療を継続していくにはセルフケア支援は必須

の看護援助といえる．またがんと診断され，治療を受け，がんと共存しつつ生活を再構築し，療養生活を送っていくためには，副作用の事ばかりではなく，精神的，社会的な面でさまざまな困難が予測される．H18・19 年度科学研究費補助金により患者・家族，化学療法に携わる看護師への面接調査を実施し，セルフケア支援プログラム開発のための基礎的データを得ることができた．患者は身体面では化学療法の副作用に苦悩し，日常生活のしづらさを抱えながら，精神面では医療者不在の生活への不安や看病してくれる家族に依存と遠慮というアンビバレンツな思いをもち，癌と共生することに限界や脅威を感じながら療養生活を送っていた．また家族には家事や患者の送迎という新たな役割が生じており，時間や身体的にも精神的にも負担になっていた．このような負担や不安など様々な思いを医療者に聞いてほしい，分かってほしい，話せる場を設けてほしいとの強い訴えがあったが，「患者の検査や治療は半日かかるがボーと待っている」など待ち時間がほとんど活用されていなかった．治療や病気の情報が正確に伝わっていないこと，特に多くの家族が関わる場合には関係悪化の原因に発展していた．これらのことより患者・家族に対して病気や化学療法についての適切な認知を促すための認知的支援，セルフケア支援のための教育的支援，患者は勿論，家族への情緒的支援によりエンパワーメントを高めていくことがセルフケア支援を行う上で鍵となることが明らかになった．これらを踏まえセルフケア支援プログラム試案を開発することができた．そのため本研究では開発したプログラム試案の有用性を評価したいと考えた．またプログラム内容の大部分を占めていた，患者・家族が療養生活の中で最も困難と捉えていた化学療法に伴う副作用の対処法についての指導を充実・強化するための視聴覚教材を作成し，その有用性についても検討することとした．

２．研究の目的

(1)． プログラムのなかで患者・家族が療養生活の中で最も困難と捉えていた化学療法に伴う副作用の対処法についての指導を充実･強化するための視聴覚教材を作成し,その有用性について検討する．

(2).開発したセルフケア支援プログラム試案に基づく介入を行い，有用性を検討する

３．研究の方法

(1)．視聴覚教材（DVD：Digital Versatile Disc）の作成

①医療施設で使用されているセルフケア指導用の教材を収集，及び英国で収集した資料や文献なども含め DVD の構成や具体的内容などについて検討する．

②先行研究[1)]に基づき，患者・家族が生みだした工夫など共有化できる内容やニーズを教材に取り入れる為の内容を抽出し検討する．

③DVD のための資料作成及びナレーション等を検討し，DVD を作成する．

④外来がん化学療法を受けている患者とその家族，化学療法に携わっている看護師，認定看護師を対象とし，作成した DVD の視聴を依頼し，理解度や感想などについて面接調査し，有用性及び改善点などを評価・検討する．

(2)．セルフケア支援プログラムに基づく介入と有用性の検討

①先行研究[1)]で作成した試案とそれぞれの施設の外来化学療法室で実践されているセルフケア支援内容や方策などの情報収集を行い，介入に向けた準備を行う．

②研究協力病院の同意を得て，セルフケア支援プログラム試案に基づいた看護介入を実施し，その効果を明らかにし，セルフケア支援プログラムを完成する．

③②についての研究同意が得られない場合は，病棟か外来で化学療法に携わっている看護師を対象とし，実践内容や課題などを面接調査し，試案と比較・検討し，セルフケア支援プログラムとして完成させる．

４．研究成果

(1)．視聴覚教材（DVD）の作成と有用性の検討

①．DVD作成まで

先行研究[1)]から患者・家族の療養上の困難として「副作用による苦悩」が抽出された．なかでも＜味覚障害による食欲不振＞＜嘔気・嘔吐に対する苦悩＞＜脱毛による容姿の変貌＞＜体のだるさ・しんどさの出現＞の関する内容が多く抽出され，患者は治療を継続するなかで様々な副作用による苦悩を体験していたことが明らかになった．そのため副作用に対する対処方法，特にそれについての工夫

などを分かりやすく紹介し,「副作用とうまく付き合いながら治療が継続できる」ことを教材化のコンセプトとし，内容を構成していくこととした．教材を患者・家族に使用する時期は，基本的には何時でも繰り返し活用できることとしたが，主には入院し，初回の化学療法を終了し，外来通院を開始する時に使用することを想定した内容とした．

視聴覚教材として，何を媒体とするかについて，医療施設で使用されているセルフケア指導用の教材や英国で収集した資料や文献などを基に検討した.ほとんどの医療施設では製薬会社が作成した冊子やパンフレットが患者に手渡されており，必要時，個別に言葉による補足情報が提供されていた．英国では，薬剤別の冊子があり，その薬剤を使用し発症が予測される副作用や対処，さらに詳細な情報を希望する人向けのサイトの紹介が掲載されていた．それを各患者用にファイルし，手渡されていた．日本と比較し医療施設の数が少なく，患者の自律度が高い医療事情を反映したものであると考えられた．

これらをふまえ検討した結果，視聴覚教材としてDVDが効果的であると考え作成することとした．その理由は，ほとんどの施設で，患者は治療中リクライニングチェアに座り，テレビを見ていることが多く，DVDであれば化学療法を受けている間に繰り返し視聴できる．また家族への面接調査で患者を送迎した後の待ち時間が長く負担感を感じていた人が多くいたことより，この時間を有効活用することができる．また患者・家族向けのセルフケア支援に関する既存のDVDが見当たらなかったことなどによる．

②．DVD の作成

作成にあたっては，A 病院の協力を得て化学療法室や手洗い場面などの撮影を行い，各章に動画やイラストを取り入れて 6 章で構成した．

内容の概略は以下のとおりである．

1 章：外来化学療法をはじめられる方に

化学療法と副作用対策へのセルフケアの意識づけを中心とした．A 病院の外来化学療法室の実写を取り入れ治療室を紹介，高額医療費の助成，チーム医療でサポートしていることなどの説明を行った．

2 章：感染を防ぐ

感染防止の必要性の意識づけを中心とした．手洗いのタイミング，衛生学的手洗いの動画を入れ，「きれいに手を洗うこと」とはどのように洗うことかを具体的に説明した．

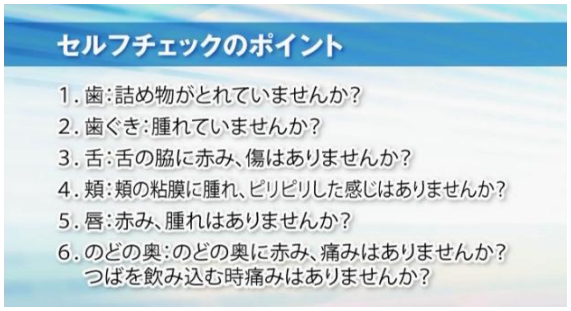
3 章：食事を美味しく食べる

食事がおいしく食べられることは療養生活を支える上で重要なことであるので、食欲不振，吐き気やおう吐，味覚の変化，口内炎の副作用症状を取り上げ,症状の起因,出現しやすい時期の説明,

また副作用が起きた時，食事でどのような工夫ができるかを紹介した．

4 章：お口のトラブルを防ぐ

治療前の歯科受診の必要性や毎日のセルフチェックのポイント，口腔ケアの方法，歯ブラシの選び方，痛む時の対処法などを紹介した．



5 章：脱毛に備える－脱毛と上手に付き合いましょう－

脱毛の起因や抗がん剤の種類と脱毛の程度に関する知識，脱毛への対処の仕方～治療開始から自毛発毛までの日常生活場面でのセルフケアの方法について，かつらの選び方，かつら以外の対処法の紹介などをした．

6 章：副作用とうまく付き合いながら治療を続ける

副作用とうまく付き合っていく方法として，自己管理の必要性，体調管理ノートの作成，異常症状の出現と緊急連絡の必要性，医療者と良い関係を築くことの大切さなどを紹介した．

全章の視聴時間は，約 37 分で，すべての章を続けて見ることもできるし，関心のある章だけ見られるように章立てを行い編集した．DVD を視聴することによって，治療開始前から段階的にセルフケアに向けた知識の獲得と具体的な準備を行なうことができ，対処能力や困難を乗り越える力が高まり，副作用とうまく付き合いながら治療が継続できると考えられた．

③DVD の有用性の検討

外来がん化学療法を受けている患者とその家族，化学療法に携わっている看護師，認定看護師を対象とし，作成した DVD の試聴を依頼し，理解度や感想などを面接調査し，有用性及び改善点などを評価・検討した．

＜患者・家族への調査＞

【方法】外来がん化学療法を受ける患者３名とその家族３名に DVD の視聴を依頼し，後日，時間，イラスト，役立つ内容，分かりにくかった内容，他に知りたい内容などについて面接を実施した．実施にあたっては当該施設の倫理委員会の承認を得て行った．

【結果】患者は，全員血液疾患で化学療法を受けており，家族は，夫，妻，息子であった．患者からの良かった点として，「DVD の画面が小さく長くみると疲れるが，印刷物より目が疲れず繰り返し見られるのが良い」「家族全員でみたがとてもわかりやすかった．特に手洗いをとうがいが役立った」などが語られた．家族は，患者と類似した内容であったが，「言いにくい病名や副作用について DVD が説明してくれるのでよい」「DVD を見ることにより治療を受けることや死もあること，家族として支えなければならないという覚悟ができた」「公立の図書館に置いてほしい」「家族が言っても聞かないことを DVD で説明されると患者が聞いてくれる」などの家族としての思いが込められた感想が語られた．このことより家族へのセルフケア支援を行っていく上で指導的な面だけでなく，病名告知や治療などへの家族の思いに焦点をあてた心理面でのサポートの必要性が明らかになった．家族への支援プログラムの情緒的支援の重要性が再確認できた．「メモをしようと思うと画面が変わる」「病気別の DVD があればよい」「字が小さい」「薬の説明は分かりにくかった」などの改善点も語られた．

＜看護師への調査＞

・外来看護師への調査

【方法】250 床の総合病院の外来でがん看護に携わる看護師 10 名に作成したセルフケア支援プログラムの説明と DVD 視聴を行い，その後アンケートを行った．質問内容は，視聴覚教材の活用可能性，工夫点，改善点などである．活用可能性は 1～4 点のリッカートスケールを使用し，点数の高い方を可能性が高いとした．調査の実施にあたり，対象にプライバシー及びデータの保護，研究参加における任意性などを説明し同意を得るなどの倫理的配慮を行った．

【結果】DVD の活用可能性は，平均 3.5 点（2～4 点）であった．使用時期は，入院後の治療開始時や化学療法についてのオリエンテーション時に使用

したいがとほとんどで,外来化学療法室での使用は特化していなかった．構成，内容については,「イラストによる具体的な提示があるので分かりやすい」「副作用の予測ができやすく予防法も具体的で自己チェックしやすので患者･家族の安心につながる」などの記載がみられた．また改善点として,医療費の助成や手続き方法などの具体的な内容を充実する必要があるとの意見があった.

・病棟看護師への調査

【方法】約 400 床の総合病院でがん化学療法に携わる病棟看護師 8 名に作成した DVD 視聴を行い，その後自記式質問紙によるアンケートを行った．質問内容及び倫理的配慮は前述の調査と同様におこなった.

【結果】DVD の活用可能性は，平均 3.8 点 (3～4) であった．使用時期は，入院直後の治療導入前や後の再教育，外来治療に移行時，医師からの説明後に使用したいであった．内容については，「副作用の発現･軽快時期が説明されており安心できる」「心理面でもフォローがあり役立つ」「優しくゆっくりとし説明で分かりやすかった」などであった．改善点として，「高齢の患者が多いので時間が長い」「薬名は必要ない」などの意見があった.

・がん化学療法看護認定看護師への調査

【方法】400 床以上の総合病院外来がん化学療法室で直接的に化学療法に携わっている認定看護師 2 名に，使用状況，使用中の患者・家族の様子などについて面接調査を実施した．調査の実施にあたり倫理的配慮を行った.

【結果】「高齢の患者が多く操作が分からず，メモを取りたいが画面が変わるので難しそうなので希望者には配布するとよい」「施設により指導内容が違うので図書館などに置くとよい」「先に DVD を視聴してもらい，その後，個別指導をすると理解がしやすく効果的である」「手洗いとうがいとどちらを先にする方がよいかと患者から聞かれたが具体的な内容があるとよい」「手洗いの動画はしっかり洗う部位が分かりやすくて良い」「時間が長い」など実践場面での有用性や改善点が明らかになった.

以上の通り，使用時期は病棟，外来とも化学療法開始時や外来治療への移行時が多かった.時間や文字の大きさなどの改善点はあったが，患者・家族のセルフケア支援に向け DVD の有用性は高いと評価された.

(2).開発したセルフケア支援プログラム試案に基づく介入と有用性の検討

医療施設でのセルフケア支援プログラム試案に基づく直接的な介入については研究協力が得られなかったため外来で化学療法に携わっている認定看護師 2 名を対象とし，実践内容等を面接調査し，試案と比較・検討し評価した.

その結果,1 名の施設は約 1000 床の総合病院で，通院治療センターに化学療法患者用ベッドが 46 床あり，1 日 50 名～70 名の治療が行われており，来年センター化する予定であった．がん化学療法看護認定看護師は 1 名で病棟と兼務し，週 2 回程度，通院センターで働いており，専門性は十分発揮されていない現状があった．病棟は，初回治療のため入院する患者は多いが，薬剤師や医師が治療や脱毛,感染症について説明をすることが多く，看護師の関わりは少ない状況であった．セルフケア支援はそれぞれの外来部門で実施しており，統一したものはなかった．今年度は統一して使用できる体調管理表の作成を検討中であった．そのため今後，開発したセルフケア支援プログラムの導入に向け検討を重ねていくこととした.

他の 1 名の施設は，約 400 床の総合病院で中央処置室にベッドが 5 床あり，主としてがん化学療法を実施していた．がん化学療法看護認定看護師と外来看護師 1 名が常駐し，認定看護師は病棟に入院中のがん患者が外来治療に移行する時には病棟での指導を受け持っていた．そのため病棟看護師は指導にはほとんど携わらず，医師，認定看護師に任せている現状があり，今後，改善していきたいということであった．指導は，開発した支援プログラムと類似した内容でパンフレットに基づき説明されており，DVD の使用希望は高かった．特に病棟看護師が統一したセルフケア支援ができるための教材としての有用性は高かった．また個別指導に対するニーズも高く，患者から治療計画と合わせ,「あなたの場合は何月何日位からこのような有害事象が出現するかもしれない」など具体的に示してほしいとの希望があり，今後，プログラムを基本とした個別的な指導内容を作成する必要性が示唆された．また皮膚障害の副作用が増えているので DVD の項目に追加してほしいとの要望もあった.

以上のことから，それぞれの医療施設によりセ

ルフケア支援の体制,方法,内容などが異なり，画一したものはなく，化学療法に携わる看護師の知識や意識づけによって施設間や病棟，外来でのセルフケア支援の格差が見られた．そして人員や支援マニュアル，指導教材などが整備されておらず，早急な標準化や均てん化が求められていた．折しも研究者らが医療施設での試案に基づいた介入研究の調整を開始した頃，日本がん看護学会から,「外来がん化学療法看護の手引き」[2)]が発行され，外来において化学療法看護の質を維持・向上させるための基本事項が提示された．今後，臨床での有用性や患者・家族への看護の効果について評価を繰り返し，標準化されたケアガイドラインとして発展させていくためのものであった．がん対策基本法、がん対策推進基本計画を背景に、急速に外来がん化学療法へのニーズが増加していることから、標準化されたケア提供ができるよう，今後も開発したセルフケア支援プログラムを試用し，検討を重ねていきたいと考える．

引用文献

1)掛橋千賀子他：外来がん化学療法を受ける患者･家族のセルフケア支援プログラムの開発，2006～2007 年度科学研究費補助金(基盤研究 C)，研究成果報告書，2008.

２）日本がん看護学会がん看護技術開発特別委員会編：外来がん化学療法看護の手引き，第１版，2010.

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①掛橋千賀子，名越恵美，若崎敦子，礒本暁子：外来がん化学療法を受ける患者・家族のセルフケア支援，外来看護，査読無，16 巻， 2011， 59～66.

〔学会発表〕（計６件）

①名越恵美，掛橋千賀子，若崎敦子：外来がん化学療法を受ける患者・家族のセルフケア支援に関する視聴覚教材有用性の検討（第１報）－外来看護師への調査より，第25回日本がん看護学会学術集会，2011年2月12・13日，神戸市.

②若崎敦子，掛橋千賀子，名越恵美：外来がん化学療法を受ける患者･家族のセルフケア支援－プログラム開発に向けた視聴覚教材作成を中心に，第 36 回日本看護研究学会学術集会，2011 年 8 月 21・22 日，岡山市.

③若崎淳子，掛橋千賀子，礒本暁子，名越恵美：外来がん化学療法を受ける患者のセルフケア支援－初期治療過程に在る乳がん患者の脱毛対策を中心に，第 24 回日本がん看護学会学術集会，2010 年 2 月 13・14 日，静岡市.

④名越恵美，犬飼昌子，礒本暁子，近藤なつき，掛橋千賀子：外来がん化学療法を受ける患者･家族のセルフケア支援プログラムの開発－第２報：家族の療養上の体験，第 23 回日本がん看護学会学術集会，2009 年 2 月 7・8 日，宜野湾市.

⑤若崎淳子，名越恵美，犬飼昌子，礒本暁子，掛橋千賀子:外来がん化学療法を受ける患者･家族のセルフケア支援プログラムの開発－第３報：セルフケアプログラム作成，第23回日本がん看護学会学術集会，2009年2月7・8日，宜野湾市.

⑥掛橋千賀子，礒本暁子，犬飼昌子，近藤なつき，名越恵美，若崎淳子：外来がん化学療法を受ける患者・家族のセルフケアプログラムの開発―第1報：患者の療養上の困難，第23回日本がん看護学会学術集会，2009年2月7・8日，宜野湾市.

６．研究組織

(1)研究代表者
掛橋　千賀子（KAKEHASHI CHIKAKO）
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：60185726

(2)研究分担者
若崎　敦子（WAKASAKI ATSUKO）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授
研究者番号：50331814

(3)研究分担者
名越　恵美（NAGOSHI MEGUMI）
福山平成大学・看護学部・准教授
研究者番号：20341141

(4)研究分担者
礒本　暁子（ISOMOTO AKIKO）
元岡山県立大学・保健福祉学部・助手
研究者番号：30275367

(5)研究協力者
犬飼　昌子（INUKAI　MASAKO）
岡山大学病院・腫瘍センター・副看護師長